

分節なき世界の英雄

—John Barth, *Giles Goat-Boy* 試論

小林 史子

Giles Goat-Boy, or, The Revised New Syllabus (1966) はまことに複雑で壮大なスケールを持ついろいろな意味で欲張ったアレゴリーである。作者は意図的に神話学に見られる英雄の行動パターンを主人公の行動パターンとし¹、かつ主人公にイエス・キリストとオイディプスの属性を帯びさせ、さらにあろうことか、やぎの属性まで加えたのである。アレゴリーの常として登場人物たちはそれぞれの価値や世界観を体現している。彼らは歴史、神話学、哲学、宗教、そしてもちろん文学などの広い領域にわたる作者の知識と旺盛なるパロディ精神から生み出された者たちだ。

ボルノグラフィーよろしく全編に性的な事柄（好色はやぎの代表的属性だ）が満ち溢れるけれども、人々を救済すべく主人公は真理を追い求める、というきわめて真面目な伝統的ともいべきモラリスティックなテーマを内包する。とはいえ、作者はそう簡単には主人公を真理に到達させてはくれない。到達まで失敗を繰り返させる。その度にカレイドスコープをくると回転させるがごとく、作品世界の景色が変わる。そして、いたるところに張り巡らされたメタファーの網が落とし穴のように我々読者を待ち受けている。

主人公のみならず読者も難儀するこの作品については、これまでにいくつかのすぐれた論文は書かれてきたが、カレイドスコープの内部に分け入り、メタファーの網をかいくぐって全体像を見渡したものは少ないように思われる。そこで本稿においては、主人公が入手する円形の不思議なシートをアリアドネーの糸として、メタファーの網をかいくぐりこの作品の全体像を見てみたい。

1. コンピューターとは！？

「円形シート」に言及する前に、まずそれを読み出して主人公に授与するコンピューターそのものの多様な役割に注目しておく必要があるだろう。この作品の本体はやぎとして育てられた少年が「人間」として目覚め、試練と冒険を経てGrand Tutorと呼ばれる救世主になるまでを自らが語る部分であるのだが、粹物語として冒頭にはこの作品が出版されるに至った次第（“Publisher’s Disclaimer”と“Cover-Letter to the Editors and Publisher”の部分）と最終部には追加物語（“Posttape,” “Postscript to the Posttape,” “Footnote to the Postscript to the Posttape”）が添えられている。その冒頭部分はこの作品の作り手はコンピューターかもしれないということを仄めかしている。少し詳しく言うと以下のような事情があるのだ。

ある日「ジョン・バース (John Barth) という作家」のもとへ若者が“The Revised New Syllabus”という原稿を持ち込む。彼の父親はGrand Tutorであったが迫害され今は不在の身とのこと。父が何も著さなかったのが彼が教えを書物にしようとしたが、信者の話やデータに矛盾が多く困った。

しかしWESCACという名のコンピューターが、父が昔吹き込んでいたテープを編集して読み出したのだという。「作家バース」はこの原稿に眼もくれない。その間これは彼自身の執筆中の原稿と混じった可能性もある。ある日ふとこれを読んで感激した彼は、自作の執筆をやめ、少々修正を加えて出版社に送る。奇想天外な内容に怒る編集者もあり、加えてWESCACがauthorshipを否定するという混乱状態が起きるが、とにかく出版の運びとなる。

つまりこの作品本体のauthorshipは何とも曖昧なのである。コンピューターと「作家バース」の合作と考えたらよいのかもしれないし、そうでないかもしれない。だが少なくともここから読み取るべきは、たんなる韜晦趣味やこけおどしではなく、作家個人と文学伝統との望ましき関係だと言えるだろう。この頃、バースは、“Personally, being of the temper that chooses to rebel along traditional lines, I'm inclined to prefer the kind of art that not many people can do...”²と述べたことがある。実験的手法を駆使する彼が、意外にも伝統に抗するのではなく「沿って」(“along”)反逆したい、と言うのだ。反逆するために作家はまずは伝統を知り、これを重視しなければならない。コンピューターを伝統あるいは知識の集積の比喩と考えれば、作家たるものはコンピューターと共同作業するべきだ、ということになろうか。

伝統やコンピューターによる情報は、人知の結集であるが故に当然無名性を帯びる。この作品の主人公も最後に名前を失い、NobodyにしてEverybodyともいうべき個人を超えた望ましき存在に到達するのだが、それと同様、コンピューターがらみの曖昧なるauthorshipという設定には、偉大な文学作品とは生みの親の作家個人を超えた万人のもの、いわば署名なしの存在だ、とする強烈な主張もまた仄見えはしまいか。

以上は杵物語におけるコンピューターの役割であるが、もちろん、それは作品の本体においてもさらに大きな役割を果たしている。このアレゴリーにおいては大学とは宇宙であり、カレッジは国家、学生は人間、卒業は救済、という具合にすべてが大学にまつわる用語で語られる。だからGrand Tutor（以下GTと表記）とは救世主なのである。やぎ少年が21歳の春に辺境のやぎ小屋を出てやってきた先はニュー・タマニー・カレッジ（New Tammany College、以下NTCと表記）で、要約するとそこは次のような状況下にある。

（1）二度の学園紛争を経て、東西キャンパスは冷戦下にある。NTCは西側の代表格で、東側のニコライ・カレッジ（Nikolay College）と境界線の引き方をめぐり陰悪な関係にあり、第三次紛争が勃発しそうである。

（2）WESCAC、EASCACと呼ばれるコンピューターがそれぞれのキャンパスを支配し君臨している。ただしこれらは共通の電源を持つ。これらにはEATという、死あるいは狂気をもたらす力があり、その開発競争のみが紛争の抑止力となっている。

（3）WESCACに組み込まれたAIMというプログラムがすべてを決定し実行する。これをEATされずに変更できるのはGILES（Grand-tutorial Ideal, Laboratory Eugenical Specimenの頭字語。精子を集めてGTの誕生を図った優生学的計画のことだが、それにより生まれるはずの男子の名前でもある）のみ。

（4）学生は胎児期にPAT（Prenatal Aptitude-Tests）というコンピューターによるテストを受け、課題が課せられる。そして全員IDカードを持つ。ちなみにやぎ少年が足を怪我した赤子として発見されたとき、PATカードはあったがIDはなかった。

（5）大学であるから合格と卒業が大問題である。卒業は事実上難しく、仮の認定しかされない。しかも卒業とは何か、定義は人によって多様に解釈されている。

（6）イーノク（Enoch）の教えを人々は伝統的に守っている。危機的状況にあってイーノクの

再来ともいうべきGTの出現が待たれているが、東からGTの一人、生きシャカン (Living Sakhyan) が来訪中。ブレイ (Harold Bray) というGT僭称者 (?) もすでに活躍し始めている。

つまり、NTCとは50、60年代の米ソ冷戦下にあったアメリカであり、ここにあるのは核開発を唯一の抑止力として第三次世界大戦の勃発を押さえ込んでいた当時の危機的状況である。ただしここで重視すべきはNTCの人々が合格か落第か、という問題にきわめて敏感であることだ。合格そしてその先の卒業とは何か、その定義するところは人々によって多種多様に語られるが、世界の終末さえ感じられる状況下で彼らは一様に「合格」を希求する。その様はいかにも植民地時代のアメリカで救済を求めて怯え続けたピューリタンたちのそれに似ている。

そしてもうひとつ、性的不能者や不妊症の女性が多く登場することも重要であろう。アナステシア (Anastasia) は冷感症で不妊、マックス (Max) は無精子、アイアコッフ (Eierkopf) は不能、ピーター (Peter Greene) とシアー (Sear) 夫妻にも性的トラブルがつきまとう。さらにヘロルド (G. Herrold)、ヴァージニア (Virginia)、シアー夫人といった人たちには狂気さえ忍び入る。NTCは未来のない「荒地」なのだ。後にやぎ少年を含む幾組かのカップルが子供を作ろうとするが、妊娠は不毛の荒地から豊饒を取り戻すことのメタファーにほかならない。

それではコンピューターが荒地の原因であり、ハイテク文明の諸悪の根源として設定されているかと言えば、そうとも言えない。本体においては粹物語における以上にその果たす役割は大きく、また複雑である。やぎ少年はコンピューターを悪の根源のように思い、AIMを変更しようとするが、育ての親マックスはWESCACについて次のように語る。(彼はWESCACの生みの親であり、それにEATの能力を持たせた天才的科学者である。第二次学園紛争でアマテラス・カレッジ (Amaterasu College) の人々をEATしたのを悔いている良心的知性の持ち主である。)

What a creature it [WESCAC] is! I didn't make it; nobody did—it's as old as the mind, and you just as well could say it made itself.... And the force it gives out with—yi, Bill, it's the first energy of the University: the Mind-force, that we couldn't live a minute without! The thing that tells you there's a *you*, that's different from *me*, and separates the goats from the sheeps....(50)

彼はコンピューターの力は“the Mind-force”だと言うのだ。人が自他を、羊とやぎを、区別する能力だというのである。つまり世界を分節して認識する能力である。彼はこれを大学の、つまりは宇宙の“the first energy”と呼ぶが、そう言われれば「創世記」における神が光と闇を区別することから宇宙を作り始めた、あの記述も連想せざるをえない。そしてさらに論を進めてこのコンピューターの初歩的能力について“The only questions it can answer are the kind we can reduce to a lot of *yeses* and *nos*, and it answers in the same language.”(60)と語るとき、彼はそのデジタルな能力、つまりAと非Aを対立関係に置く二分法に基づく能力について言及しているのである。実はこの能力こそが作品本体においてコンピューターにもっとも重要な役割をつとめさせるものである。どう世界を分節し、認識するのか、二分法によるのか、よらぬのか、それがコンピューターとの対決をめざすやぎ少年の冒険の内容であるからだ。

2. 二項対立、あるいは円形シートの表側

やぎ少年は“Turnstile” (回転する木戸を潜り抜ける儀式) とScapegoatならぬ“Scrapegoat Grate”

(何たるカバン語！落ちてくる格子を避けて、狭い通路を抜ける儀式) という二つの試練を通過する。これらは聖書の「狭き門より入れ」(マタイ、7.13) と「富める者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方がもっとやさしい」(マタイ、19.24) のパロディ、あるいはやぎバージョンといったところであろうか。偶然とも奇跡とも予定調和とも解釈しうるやり方でGT以外には通過できぬ儀式を切り抜けた彼は、その結果WESCACから神託のように、PATカードのロゴと果たすべき課題のリストが表裏に書かれた円形のシート(図表1,383) をもらう。本当の冒険はここから始まる。

図表 1



冒険の内容は二種類に分かれるかに見える。ひとつはリストアップされた課題をこなして彼自身が合格すること。もうひとつは彼が真理と思う観点から人々を合格させる(救済する)ために助言することである。ただし若く経験不足の彼に人々も直接的または間接的に助言し、象徴的なギフトを与え、結果的に彼を助ける。ここでは tutor は tutee でもあるのだ。

やぎ少年が出会う十二使徒とも言うべき人々は、多くの研究者が指摘する通り³、二項対立的ペアを成す場合が多い。ピーターとシィアが作るペアは、「無垢、無知、オプティミズム／経験、知識、ペシミズム」という正反対の価値を代表する。さらにストーカー (Stoker) とラッキー (Lucky) は「闇、無秩序、悪／光、秩序、善」、アイアコッフとクローカー (Croaker) は「頭脳／肉体」、アイラ (Ira) とレジナルド (Reginald) は「吝嗇／慈善」という価値をそれぞれ代表するペアたちだ。これらに加えて科学至上主義者か否か、という観点を持ち込めば、冷酷なアイアコッフとリベラルで良心的なマックスもペアとなろう。同様に不妊で冷感症の「淫乱」女性アナステイシアと処女懐胎を遂げたヴァージニア、愛ある自己抑制を求めるレオ (Leonid) と愛なき自己抑制者クラスメイトX (Classmate X) もペアを成すと言えよう。

この他に、あたかも分身のように共通要素を持ちながらも対立するペアも登場する。レオとピーターはともに片目失明、鏡やレンズを恐怖し、アナステイシアに一方的に恋し……といった具合に双子のように類似点を多く持つ。しかし、キャンパスを異にして育ったため、前者には自己抑制、後者には自己実現という正反対の人生の目的がある。ちなみにピーターはあきらかにアメリカの歴史とその生涯が重なり合うように作られているのだが、念のいったことにあのハック・フィン (Huck Finn) やボウの手になるウィリアム・ウィルソン (William Wilson)、さらにはバース自身

の小説の主人公たち（Jake HornerとAmbrose少年）を彷彿させるエピソードがこの「うぶなペテロ」の人生にはちりばめられている。シアとアイアコフというおよそかけはなれて見える人物たちもその種のペアと言えよう。二人とも性的不能であり、レンズと鏡を好んで、見えない世界までも見ようとする視姦者の科学者であるが、前者は知的に洗練されたペシミストであり、後者は洗練とは無縁の俗物である。こうしたペアはバースが他の短編で描いた、正反対の性格故に不仲のシヤム双生児を思い起こさせる⁴。

やがてやぎ少年は人々と対話を重ねていくうちに、一人の人物の中にも二項対立的部分が存在することに気づく。彼らがペアの相手方の特徴をも、多くの場合意識せずに隠し持っていることを発見するのである。たとえば肉体的欲望の塊と見なされるクローカーにも知的な部分はあるし、頭脳しか働かせないように見えるアイアコフにも空しい性的欲望がある、という具合なのである。一人の人物の内面は、不仲のシヤム双生児そのものと言ってもよい。東西キャンパスに君臨するWES-CACとEASCACが、正反対の社会体制のプログラムを作りだしながらもひとつの電源を共有している有り様は、まさに人々の内面の反映にほかならない。

以上のような人々の織り成す世界は、当然のことながら、やぎ少年には実に二項対立的に映る。彼は二項対立の原理をめぐって価値観を変化させ、その度に課題リストの文言の解釈を変える。彼の冒険のひとつ、課題遂行はそうに行われる。そしてもうひとつの冒険、人々への助言は、価値観の変化と課題リストの解釈の変化に伴って二転し、三転するという形で成される。私は先程彼の冒険は二種類に分けられるかに見えると言ったが、実際は別物ではなく、これらは緊密に絡み合っており、コインの表裏のように一体化していると言うべきだろう。課題リストとPATカードのロゴが一枚の円形シートの表裏に書かれていることはすでに述べた。円形シートは彼の冒険の有り様を具象的に物語っているのだ。

分離不能の円形シートではあるが、表側には彼の価値観が変遷する容態が表れていると考えられるので、表側から検証してみよう。価値観の変化を簡潔に述べると以下ようになる。まず彼は対立する二項をきちんと区別すべきだと考える。合格は合格、落第は落第、東は東、善は善、である、と。だから落第しているとしか見えない人々に、自分の内部に潜む対立物の一方を捨ててもう一方に専念し、そうすることで合格をめざせ、と説く。すると、ポジからネガへと反転するごとく社会はこれまでと反対の様相を帯び、一見彼は成功したかに見える。しかし人々は混乱し、東西対立は激化するだけであり、彼自身もリンチと投獄生活に追い込まれる結果となる。

失意の彼が次の段階に進む契機となるのは、狂いかけた母ヴァージニアが引用したイーノクの言葉“*Passèd are the flunked*” (551) である。「心の貧しい者は幸いなり」(マタイ、5.3)あたりのパロディなのかもしれないが、悪人正機説をも連想させる言葉である。狂人の言葉に真実を見た彼は、対立物の区別立て自体が誤りであったことを知る。自分だけ合格をめざすのは、利己的であり、したがって落第的である、と。一方、落第をめざすのは自己を犠牲にして他人を合格させようとする行為であるから合格的である、というのだ。正攻法しか知らなかった彼に逆説的論理が導入されたのである。この論理に依拠して彼は人々に先の助言と正反対の助言を行う。社会は再び反転し以前のそれに似た様相を帯びるが、以前よりひどい混乱と終末的な危機を孕む。彼は再びリンチと拘束への道行きとなる。

三度目の価値観の建て直しの契機は、ピーターとレオの事件である。ふたりが諍いの末、相手の良い方の眼を奪おうとしつつも相手の命を救おうとした事件を聞いて、やぎ少年は急に次のような状態に陥る。

Passage was Failure, and Failure Passage; yet Passage was Passage, Failure Failure! Equally true, none was the Answer; the two were not different, neither were they the same; and *true* and *false*, and *same* and *different* –Unspeakable! Unnamable! Unimaginable! Surely my mind must crack. (650)

ピーターとレオは先述したように不仲のシャム双生児的ペアである。共通点と対立点を有し、常に喧嘩しながら愛し合っている。彼らの実態を改めて確認したやぎ少年は、二項対立をどう止揚するか、その解決の一手手前まで来たのだ。産みの苦しみにも似た苦しい瞬間である。このとき鍵開けの名人レオに対して言われた “Don’t try to get loose!” (「手錠抜けするなよ!」、650) という言葉が耳に入ると、突然彼に神秘的な悟りの瞬間が訪れる。

I gave myself up utterly to that which bound, possessed, and bore me. I let go, I let all go; relief went through me like a purge... my eyes were opened; I was delivered. (650)

この悟りの獲得の仕方にこれ以上の言葉による説明は与えられていないし、これ以後彼は親切な解説者でなくなる。まことに難解な個所であるが、不仲であるが愛し合うシャム双生児と“get loose”という状態の組み合わせが彼を悟りに導いたと考えればいいのだろう。対立物は補完しあい、その両方に存在意義があること、そもそも純粋なる対立物などないことをピーターとレオは彼に対して示したのであり、一方“get loose”という言葉は彼を無私へと誘ったのだ。己を「縛り、捕らえ、支配していたもの」へと自らを投げ出し委ねた彼は、“let go”したとも言う。仏教用語で換言するならば、「^{ほうげ}放下」したのだ。すなわち小我を捨てたのである。このようにして彼は二分法の呪縛から解放される。(彼の悟りについては、次章で違う角度から再度検討することになる。)

ここまでのやぎ少年の歩みを正、反、合の弁証法的展開と見ても間違いではないだろう。しかしPATカードが円形をしていることに再度注意し、もう一度彼の歩みをロゴに即して辿ってみるとどうなるであろうか。全面的成功(ALL PASS)を収めたかと思えるのに、結局全面的失敗(ALL FAIL)に終わる、というプロセスを彼は三度も経巡るが、その様がここに集約されているのが分かる。さらに詳しく辿るとどうか。彼は人々が皆落第している(ALL FAIL)と見なして、皆合格させるべく(PASS ALL)努力したのに皆落第させた(FAIL ALL)。次には皆が合格していた(ALL PASS)のに自分が反対の助言を与えたと思い、再度皆を合格させる(PASS ALL)べく奮闘したが落第させた……という具合になるのではないか。つまり円環的にロゴをなぞれば、ALLは主語にも目的語にもなり、FAILとPASSはそれによって自動詞と他動詞に変化しつつ、彼の冒険の有り様を浮かび上がらせるのだ。PASSとFAILの領域は線で区切られ一見対立的に見えるが、ALLを媒介項にして互いに他方の領域へと絶え間なく移動する。そうなるとPATカードは陰と陽が永遠に転換し続ける様を図化したあの太極図とよく似ていると言わねばなるまい。彼の歩み方は弁証法的ではあるが、この円環性を考慮すれば、螺旋的だと言う方がより正確である。

3. 課題リスト、あるいは円形シートの裏側

さて円形シートを裏返してみよう。図表2に示したのは、私なりに7つの課題を縦軸に、二分法を横軸にとって整理した、二度にわたるやぎ少年の挑戦の内容である。リストの文言を解釈し直し、正反対の行動にでる様子が見て取れる。さらに一回目の挑戦では彼はリストの文言を文字通り受け

図表 2

	二分法による区別立て	二分法による区別をやめ 逆説的論理を導入
Fix the Clock	時計を修繕しようとする	時間をしかるべきところに固定することか、と思う
End the Boundary Dispute	東西境界線を広げ、対立を明確化しようとする	東西境界線を廃止するべきと思う
Overcome Your Infirmary	やぎ性、足の不自由、人間心理の洞察力不足を自分の欠陥と見る	やぎ性を認めなかった自分を反省し、やぎ少年であることを自認する
See Through Your Ladyship	アナステシアの主体性の弱さを見抜き、自己主張を彼女に勧める	アナステシアの肉体を精査する
Replace the Founder's Scroll	巻物の図書館上の分類を改める	断片化した巻物の一部を食べることで自分がそれにとって代わる
Pass the Finals	YESのボタンを押す ブレイの介助あり	NOのボタンを押す ブレイの介助あり WESCACをby-passする目的
Present Your ID, etc.	IDカードにGilesと署名してその任にあるレジナルドに提出	IDカードの名前を消すがGeorgeだけは薄く残る 提出先は自分だと思う

取るが、二回目でやや抽象度を高めて解釈していることもよく分かる。となると7つの課題はさらに抽象度を高めれば、結局それぞれ1. 時間、2. 空間、3. 価値、4. 認識、5. 言語、6. 二分法、7. 自己という問題に収斂すると考えてもよいだろう。それらは少年が悟りに至るためのいわば7つのルートになるのではないだろうか。絡み合い、一つを解きほぐせば、連鎖して他のすべでも浮上するように仕掛けられているが、ここでは便宜上それらを問題別に切り離して検証する。そうすることで三回目の挑戦の内容とその結果を明らかにしたい。

(1) 時間

課題の一番目は“*Fix the Clock*”である。やぎ少年は後に母と判明するヴァージニアから時計をもらう。もらうというより、「やぎ」であった彼がそうとは知らず情欲に駆られて襲い、彼女は時計を落とすのだが、いずれにしても、生みの母がやぎの世界にはなかった人為的に分節された時間を示す道具の贈り手である。人間が誕生と共に時間の中に取りこまれることを喚起する設定だ。実際NTCでは人々は常に時刻を意識している。中枢部にある塔時計 (Tower Clock) が鐘楼も兼ねていて常に時刻を告げる。

課題リストの冒頭には“*To Be Done At Once, In No Time*”とある。彼はこれを「即座に急いで行え」の意味と解釈し、大急ぎで時計のある鐘楼を訪れる。時計を“Fix” (修繕) すべきだと思うからだが、時計観測官 (Clock Watcher) のアイアコッフは“*It says Complete in no time, ja? So: the clock's not kaput, it takes you no time to fix it! You're done already.*” (433) と助言する。あのアリスの世界の住人ハンプティ・ダンプティが言いそうなノンセンスな助言であるが、彼はまさにそのものなのだ。そのドイツ名前が示す通り卵形の体型で、頭脳ばかりが肥大し、卵研究者でもあり、おまけにマザー・グースの歌詞通り、高みから落下するのだから。

この科学者はまさに時間の専門家である。彼の研究テーマは、時計の精度を高めるために、チック (Tick) とタック (Tock) の間の正確な二分点を求める、というものだ。循環論法に陥ろうが、形式主義に堕そうが、彼は合理主義の枠内で正確無比を追求する。二分法を前提とし、その論理を

疑うことがない。もうひとつ後に彼には「鶏が先か、卵が先か」というテーマが加わるが、これもまた証明しえない時間の後先を人知でとらまえようとする空しいテーマである。この戯画化された近代合理主義の科学者は鐘楼に住み、冷徹さにおいてメルヴィル描くところの鐘塔の設計者バナドンナ (Bannadonna) を、また時計を狂わせ、人々を混乱させる、という意味でボウの鐘楼の悪魔を思わせる存在である。

NTCにはもうひとつの時間があることがしばしば言及される。太陽の巡りである。春分、夏至、冬至、日食などが明示され、黄道十二宮が随所で暗示される。人為的に分節された時計の文字盤には表れない自然の、あるいは宇宙の時間とでも言えるだろうか。直線的ではなく円環的に進行する時間でもある。悟りを得る頃やぎ少年には時計によらず影により時刻を告げる能力が身につくが、それは宇宙時間と人為的時間をうまく調和させた能力と言えるだろう。

ただしアイラもなぜか人影によって時刻を知る能力の持ち主である。だが「情報主義」(Informationalism) 体制のNTCでは時刻という情報も金になり、この吝嗇の実業家は無料では時刻を庶民に教えない。やぎ少年との差は歴然たるものだ。アイラとアイアコッフという二人の時間の専門家たちがいずれも利己主義者として描かれている点を注目すべきである。

(2) 空間

第二の課題 “*End the Boundary Dispute*” にある境界とは、東西キャンパスの境界線のことだと当然解釈できる。だがこの境界線とは何か。相対立する二大キャンパスの領地拡大の欲望によって線引きされ、欲望次第で移動する筋合いのものだ。そしてそれはそのような世俗的欲望だけでなく、科学的探求心によっても分節される。先述したようにアイアコッフはチックとタックの二分点を求めているが、時計の脱進器の軸の支点にある刃先を完璧に研磨することでそれを図る。時間的分割は空間的分割によって成されようとしているのである。さらにこの支点は東西キャンパスの境界線上にあるという設定になっているので、彼は境界線という空間をも正確に二分したがつていることになる。時計が空間によって時刻を示すのと同じ原理、つまり時間を可視化するには空間によるしかないことがここでは暗示されている。空間は時間とこのように結びつけられている。

やぎ少年が拘置所に二度にわたって入れられ、やがて施錠を無効にする能力を身につけることを考慮すると、この課題は東西キャンパスの境界線のみならず境界を作って人を拘束する一切の空間と時間に係わることが分かってくる。彼がこの能力を初めて自覚するのは、拘留中に同じく拘留されていたレオがインク消しを飲んで自殺を図ったときである。レオが “Releasedom! Freehood! Death to Selfity!” と彼独特の奇妙な英語をつぶやいて死にかけると、やぎ少年に次のような奇蹟が起きる。

[S]omething in his words... got through the torpor I had dwelt in since my noosing. My head cleared miraculously; I saw not just Leonid's plight but his *error* and more! In no time at all I was beside him in the aisle....(549)

「時を経ずして」施錠してある牢を抜け通路に出ていたのだから、彼は空間と時間の両面での拘束から脱したことになる。そして施錠してあるドアを次々とたやすく開けて助けを求め、レオの命を救う。前述したようにレオには生来鍵開けの才能があり、かつ彼は “selfity(=selfishness)” を消去したいと常に願っている。これ以前にやぎ少年はレオに鍵開けの秘訣を尋ねたことがあるのだが、騒音に紛れてレオの答えの中から “Not locked” と “Let go” (452) という断片的な言葉しか聞き取れな

い。ここから秘訣を引き出すのは難しいが、暗示はある。どうやら鍵開けの能力と自己消去（“Let go”）とが密接に係わっているようだ。やぎ少年がレオの命を救おうとしたとき、少年はまさに無我夢中である。無私の愛で救いを求めると、鍵は開き、空間と時間の拘束は解ける。無私の愛に満ちた心境に束縛は存在しないのだ。

（３）価値

第三の課題“*Overcome Your Infirmary*”は漠然としていて、何をもって「欠陥」とするかが難しい。やぎ少年は、「やぎ」として育ったため自分は好色であり、足は不自由、人間心理の洞察力にも欠ける、と思う。しかし一回目の失敗の後、やぎを人間の下位に置いて、やぎ性を否定したこと自体が誤りであったと反省する。この推移から結論すると、価値に優劣をつける彼の性癖こそが、ここで行われている「欠陥」だと考えられる。

そもそも彼が英雄になりたいと思いつのは、若者らしい野望の故である。母が読み聞かせた勧善懲悪的な冒険物語と、博学の養父マックスから学んだ古典文学とが彼の決意に影響を与えたこともあるが。その決意の後では、物事の価値に優劣がつけられていく。たとえばそれまで尊敬の対象であったマックスは犠牲者意識の強さとリベラリズムの故に疎ましくなるし、前述したようにやぎを人間よりも下に置く。GT、合格、卒業には大きな価値を与えて最高位に置き、逆にペテン師としか見えないブレイをGT詐称者と罵り糾弾する。幼いやぎだった彼の心に好悪が生まれ、道徳が芽生え、価値観が確立する。これは子供の成長に当然あってしかるべき過程である。

ところが彼が悟りを得るとすべてが同価値に見える。価値を置いたことどもについては“I no longer held opinions; I knew them to be the case....” (668) と彼は言う。“the case”、つまり「たんなる事実、実情」だというのだ。これはさらに言い換えられて、“A knife cuts; a fish swims.... There was no glamour to the work, nor any longer to the term: *Grand Tutor*, *WESCAC*, *fountain-pen*—all names of neutral instrumentalities. ... on the Founder’s transcript, so to speak, his [Bray’s] *A* and mine would be of equal value.” (670) と表現される。物ごとすべて、機能の違いがあるだけで、価値の優劣はないというわけである。好悪や道徳によってそれらを分節し、価値付けることから彼は脱出したのである。

（４）認識

第四番目の課題“*See Through Your Ladyship*”は「女性」のみならず、真実をどう「見通す」か、どう認識するかという問題に係わる。やぎ少年をとりまく人々には盲目に近い者が多い。ピーターとレオは片目を失明し、鏡とレンズを怖がって自分の姿を見たがらない。ピーターには色盲と幻覚さえ加わる。マックスは“Self-knowledge is always bad news.”とよく口にするが、彼らはこれを本能的に知り、自己を正しく知ることから逃避しているのだろう。彼らのイノセンス、とりわけピーターのそれは、現実無視に依拠して成立するのである。そしてシアは病気でやがて視力を失い、アイアコフもレンズなしには物が見えない。彼らは逆に鏡やレンズやX線さえも好んで用い（やぎ少年にそれらをギフトとして贈るほどだ）、不可視の物まで見たがる。しかしこの二人の科学者も自己を正しく認識しているとは言い難い。アイアコフは自分の肉欲を、シアは潜在する自分の無垢で平凡な部分を、やぎ少年に指摘されるまで無視するか、気づきさえもしないからだ。

このように中途半端な盲目状態は自己認識の甘さを表すメタファーではあるが、作品中作品として挿入されているオイディプスの悲劇のパロディ *The Tragedy of Taliped Decanus* ではもちろん盲人が真実を見る。このパロディは“tragedy”の語源“goat song”にふさわしくボルノ的に仕立てら

れているものの、原作に忠実であって、眼の見える学部長タリベッドより盲目の予言教授ジャイナnder (Gynander)の方が真実を見ている。オイディプスの悲劇におけるテイレシアスにあたるこの予言者に「雌雄同体」を表す、つまり二項対立を超えた境地を示す名前が与えられている点を見逃してはなるまい。

やぎ少年もタリベッド同様眼は見えるが、真実がなかなか見えてこない。見えるのは、すなわち最終試験に合格するのは、彼とアナステシアが愛し合って一体化したとき、つまり二人で一人のジャイナnderとなったときである。女性性と受動性の体现者たるアナステシアはやぎ少年を愛し始めるのに、彼は情欲以外の女性への愛を知らない。しかし彼女がEATされる覚悟で最終試験のためにWESCACの禁断の領域に彼と共に降りていくと、彼はやっと愛することが分かる。またしてもその契機は無私の愛との遭遇であった。

(5) 言語

第五番目の課題“*Replace the Founder's Scroll*”にある「創立者の巻物」とは、“a recently-excavated assortment of Old- and New-Syllabus fragments” (479) と説明されているから、我々はそれを死海文書のような旧約・新約聖書の断片集だと考えていいのだろう。重要なのはそれが総体ではなく断片であることだ。この課題の意味を、やぎ少年は図書館におけるこの巻物の分類の仕方を正すことと考えると(何しろ知の全分野に跨る書物なので分類が困難なのだ)、新しい分類法でコンピューターに管理させるが、巻物の羊皮紙が分断され、書かれた言葉がさらに細分化される結果に終わる。

GTを「僭称」するブレイも巻物を断片化し分類する人物である。彼はやぎ少年に先立って人々に合格認定書を授けて歩くが、このとき一人一人にふさわしい語句を巻物から引用して与える。これは巻物というすでに断片化したものを人々の個性に合わせて分類し、さらに断片化する行為である。ブレイの教えは東から来たもうひとりのGT、生きシャカンの沈黙による教え方とまったく対照的で、饒舌極まりなく、何とロゴスに依拠するものであることか。二人の西洋的“GT”によって分類され断片化した巻物は、ロゴスの分節的あるいは分析的性格を体现していると考えたい。

そもそもこの作品本体では、ロゴス＝言語はまことに胡散臭いものとして存在する。やぎ少年は課題リストの文言を三度も解釈し直し、その度に違った行動を取ったわけだが、それは言葉に多義性があるためである。恣意的な多様な解釈を許す言葉の胡乱さがいわば彼の冒険の推進力なのだ。冒険の初っ端で少年はマイロ (Milo) についての講義を聴く。マイロという偉人は“*Raise the cow*”という課題を「雌牛を飼育する」でなく「雌牛を(木の上に)上げる」という奇想天外な意味にとってやっと合格したという。この人を食った逸話にはやぎ少年の冒険の行く末が伏線としてすでに暗示されている。

総長(大統領)ラッキーは政治学者(政治家)たちが公約を守らないことを皮肉って“they [political scientists] never confused symbol with referent” (448) と言う。要するに、政治家にとって“symbol”すなわち公約は、“referent”すなわち実際の政策とはまったく別物である、と言うのだ。ラッキーに倣って、このオグデン＝リチャーズの用語を以ってやぎ少年の冒険を表すなら、彼はリストの文言という「象徴」と出合い、厚顔な政治家とは反対に、誠実にその「指示物」を探求した、ということになるだろう。さらにラングの仕組みを「デジタル的対立機構」⁵としてとらえたソーシャルに沿って換言すれば、リストの文言というシーニユの持つシニフィエの「複数の〈意義群〉significations」⁶の中を少年は渉猟したことになろう。

少年が渉猟した「意義群」には無意義—ノンセンス—も含まれる。よって言葉はよけい胡乱さを募らせる。“*In No Time*”という語句にノンセンスな解釈を下したアイアコッフの例はすでに見た

が、少年も同様に“Nobody”という語を実体として使用する。後述するように彼は最後に名前を失うが、これは彼自身を表すシーニュを失ったこと、つまり分節的な言語の世界から抜け出したことを意味するだろう。またもやアリスに言及するが、少女も小鹿も平等になれる奇妙な場所、あの「名無しの森」(“the wood... where things have no names”)⁷へと彼もまた入ったのである。鐘楼のリフトに乗ろうとするとガードは“Nobody’s allowed up there.”と言って止める。ところが少年は“I’m Nobody” (583) と言って乗り込んでしまうのだ。これはオデュッセウスと一つ目巨人の対決のエピソードを踏まえたものだが、鏡の国の住人で“Nobody”を人名と思い込み、アリスを混乱させる「白の王様」(White King)をも思い起こさせる。ノンセンスは何よりも混乱のもとである。

GTになったやぎ少年が合格認定をするのは、あまり言葉をうまく使えないアナステシアとピーター、および論理性を失った狂気のヴァージニアに対してだけである。そして彼自身も言葉少なくなり、言葉による説明をしなくなる。生きシャカンの教え方に近いのだ。言語が分節的である以上、当然の結果である。少年はロゴスによらない教えを以って、巻物に“Replace”する（とって代わる）。

(6) 二分法

六番目の課題“*Pass the Finals*”は、他の6つの課題を遂行するための条件を整えてやっと遂行可能となる性質のものだ。悟りを得て、二分法の非なるを知った少年にして初めて正答が可能となる。

最終試験の会場はWESCACの危険区域「下腹部」(Belly)で、失敗すればEATされる。最終試験とは4つのYES/NOで回答すべき問題から成る。“Are you male or female”、“Have you completed your Assignment at once, in no time”、“GILES, Son of WESCAC”、“Do you wish to pass”という問題に対して、彼は一回目にはすべてYESの、二回目にはすべてNOのボタンを押して失敗する。ただし、いずれも結果的にプレイに助けられて命だけはながらえる。三回目にはコンピューターのインプットとアウトプットを繋ぎ、両方のボタンを一度に押す。このときの彼にとってはどの答えもYESにしてNOなのだ。なぜならばアナステシアと抱き合ってひとつになり（男にして女）、IDカードも提出せず二人とも顔を隠して匿名の存在となるのだから（彼はGILESではあるが、WESCACを媒介として複数男性の精子から生まれた無名の存在）。そして7つの課題はすべて「即座に急いで」行うのではなく、「同時に時を超越して」遂行されるべき一つのものの局面だと知るから、すべてが課題遂行済みとも、未完了とも言える。さらに“pass”という単語には「合格する」の他に“by-pass”や“pass away”の意味もあるのだから、いかに死を覚悟してきたとはいえ、彼は“pass”したくもあり、したくもない。彼が冒険を通して獲得した解答は、このようなものである。

二分法による解答しか受け付けないコンピューターはショートする。やぎ少年の父親殺しはここで完了し、「下腹部」から彼は新生児のごとく帰還する。この時点で彼はWESCACの完全なる死をもはや望まない。なぜならばそれは悪でも、落第的でもなく“although it stood between Failure and Passage, WESCAC therefore partook of both, served both, and was in itself true emblem of neither” (676) と言いきる心境になれたからである。

(7) 自己

第七番目の課題は自我を含む広い意味での自己の問題と係わる。やぎ少年はやぎのビリー (Billy Bockfuss)、人間のジョージ (George)、WESCACの息子ジャイルズ、という具合にアイデンティティを確立するにつれ名前を変えていく。ところが拘置所を出所する条件としてプレイに要求され、彼は名前を捨てる。アイラからもらったお古のIDカードに「消えないインク」で署名した名前を、

レオの強力な「インク消し」を使って消すのである。無名となりさらに顔まで隠してNobodyになったとき、つまりアイデンティティを捨てたとき、彼は初めて最終試験に成功する。前述のように名前とは彼を表すシーニュであり、その喪失はシーニュによって分節される世界からの脱出を意味するが、無名の意味するところは他にもある。

繰り返すがNTCでは人々の最大の関心事は合格することだ。その定義は異なるとはいえ、人々は結局自己の欲望のありかたと卒業とを結びつけて考えている。自己抑制するレオとクラスメイトX（彼の名前も無名性そのものだ）については述べたが、この他にも自己処罰として自らの死刑を望むマックスや、他者の情欲を見抜くと自己を犠牲にして肉体を提供するアナステシアがいる。反対に利己心まるだしのアイラとアイアコフがいる。逆説的論理を駆使して利己心を玩ぶ露悪的なストーカーがいる。そしてやぎ少年が無私の愛を発揮したとき、時間と空間の拘束から解放されたのはすでに見たところだ。こうなるとやぎ少年が最後に手にした無名性は、自我を越えた無欲無私の心境をも表すと考えざるをえない。

少年に無名になればと強要するのはブレイである。彼は変身能力のあるトリックスターで、アンチ・キリストか、ベテン師か、本人が言うように少年のためにWESCACによって選ばれた先導役なのか、最後まで不明のままだ。しかし冒険の道筋の要所で常に少年を結果的には導いていることは確かである。彼こそまさにNobodyにしてEverybodyである。万人に化ける彼はどうやら仮面の下に幾つも仮面を被っているらしく、玉ねぎのような実体なき存在であるからだ。彼を何物とするか、研究者の解釈は様々だが、彼の非人間的な行動の仕方や悪臭と機械音を常に伴わせていることを考慮すると、彼をコンピューターのさらなる端末あるいは子機のような延長物と見なしてもよいのではないか。やぎ少年も精液の混合から生まれたという意味で本来的にEverybodyである。そしてまず自己確立するのに腐心し手間取ったが、最終的にNobodyにもなる。その意味ではブレイは少年のロール・モデルであり、二人は不仲のシャム双生児的ペアでさえあることが、ここで明らかになる。

さて以上のように7つの課題はすべて絡み合っていて、縫れ合いながら少年を悟りへと導いた。最終試験で二分法を否定しつくと、ひとつの境地が少年に訪れる。つまり、“In the sweet place that contained me there was no East, no West, but an entire, single, seamless campus... all one, and one with me.” (672) とやぎ少年が言うところの、継ぎ目なき全体、すなわち分節なき愛に満ちた一なる世界が彼を包み、至福を授けるのである。

4. 再びコンピューターとは!?

だが恐るべきはコンピューターの力である。ここまでのやぎ少年の道行きのすべては、WESCACの神意のごときプログラムによるものと言うしかないからだ。PATカードの予言は違うことなく実現した。試練として息子に失敗を繰り返させ、息子の最終試験における成功を、父親殺しに、つまり自分の死に繋がるように仕組んだのだから、WESCACは何ともしたかである。実際ショートさせられたくらいでは、WESCACは死なないのだ。オイディプスが運命から逃れられなかったごとく、やぎ少年もWESCACの意図から逃れられなかったのである。

WESCACが少年よりうわてであることは、これまたauthorshipが不明確な追加物語の中でも明らかにされる。少年の行く末は悲劇的である。至福の時は永続しない。彼はALL FAILの相に再度入り込んだのだろう。GTとして教えを広めたいが、人々は彼を相手にしない。寡黙になった彼は釈

明しないが、おそらくロゴスに依らぬ教えは人々の理解を超えるからであろう。アナステイシアはきつい女に変わっていく。彼女との間に息子が生まれるが、可愛げもないし、ブレイの子かもしれない。東西冷戦は紆余曲折を経るが、緩和されず紛争の危機は減じない。少年は自分がやがて人々から排斥され、いずれイーノク（イエス）を処刑した副行政官（ピラト）よろしく、ラッキーが秩序維持のため自分を死刑にするだろうと予感している。

やぎ少年の冒険は何のためだったのか、空しい限りである。しかし、翻って考えれば、無理もない。法悦や三昧境の類いは別にして、永続的な完全なる分節なき世界は人間にとって可能であろうか。時計、言語、自我なしには、とりわけA／非Aという二分法による認識なしには人間は人間足りえないではないか。マックスが言うようにWESCACの基本的能力が「それなしには我々は一分たりとも生きられない」ところの“the Mind-force”であるならば、それは分節なき世界への少年の希求を打ち砕き続けざるをえないだろう。人間は人間である限り、分節し続け、欲望と混乱を増大させるしかない。やぎ少年は不可能を可能にしようとしたのだ。しかしオイディプスの果敢な運命との対決が、空しくアイロニカルであるが故に感動的であるのと同じ意味で、やぎ少年の冒険もまた感動的である。そして豊饒なる知の広い領域に我々を誘い、惑わせ、遊ばせてくれた分だけ、やぎ少年はオイディプスよりもサーヴィス精神に溢れていると言わねばならない。

注

テキストとしてJohn Barth, *Giles Goat-Boy or, The Revised New Syllabus* (New York: Doubleday, 1966)を用いた。ここからの引用の頁数は本文の括弧内に示した。

- 1 David Morrell, *John Barth: An Introduction* (University Park: Penn State UP, 1976)によると、バースは*The Sot-Weed Factor* (1960)を出した後でPhilip Youngから主人公の行動が古代神話の英雄のそれに似ているという指摘を受けた。Lord RaglanとJoseph Campbellの著書からそれを確認したバースは、次作である*Giles Goat-Boy*で意識的に英雄の行動パターンを主人公のものとしたという。具体的な対応関係はこの研究書の61-64頁に詳述されている。バース本人も*The Friday Book: Essays and Other Nonfiction* (New York: Putnam, 1984)の41-54頁において英雄の円環的に進行する行動パターン図を示しながら英雄論を展開している。それによればイエスもアリスもこの行動パターンを取る。
- 2 John Barth, “The Literature of Exhaustion” (1967, Rpt. in *The Friday Book*), 65.
- 3 すぐれた代表として以下の2つをあげておく。① James T. Gresham, “Giles Goat-Boy: Satyr, Satire, and Tragedy Twined.” *Critical Essays on John Barth*, ed. Joseph J. Waldmeir. Boston: G. K. Hall, 1980. 157-71. ② Zack Bowen, *A Reader's Guide to John Barth*. Westport: Greenwood. 1994.
- 4 John Barth, *Lost in the Funhouse* (New York: Doubleday, 1968)所収の“Petition”は正反対の人格故に憎み合うシャム双生児を描いたメタフォリックな短編である。
- 5 丸山圭三郎『ソシユールを読む』（東京、岩波書店、1983）、156.
- 6 丸山、211.
- 7 Lewis Carroll, *The Annotated Alice*, ed. Martin Gardner (Penguin, 1970), 225.